湿原の文学

―ヘンリー・ソーロウをめぐって―

乳井甚三郎

ソーロウの世界

ヘンリー・ソーロウ（一八一七―六二）の故里は、マサチューセッツ州のコンコードである。同時代の詩人といってもよい、同じ州に生まれたホイッチャー（一八〇七―九二）は、彼らの時代には荒涼と酷しかった「われらが州」を、「この小さき州は土に乏しく、その境は狭く、黄なる砂はただ砂にして、そのかな山（鉱山）はただ氷と石なり、霜降る秋より雨の四月まで冬の森の歎きは余りに長く、花ふくらむ頃より木の葉落つるまでその夏の日は余りに短し、されどその岩と砂のその岡の上、学舎は建ちて荒き上の拒みしものを心のみのりこそ与うなれ」と謳っている。

ここでは昔、土を求めて石を拾い、畑の隅に積み上げたものらしく、ソーロウが生まれた町はずれの農家の絵を見ても、そんなストーンウォールが積み上げられている。おびただしい湖と沼沢、沼地、湿原がニュー・イングランドではないか。

このような、この国の自然はモナドノック山で説明がつくと思う。ニューハンプシャ州南部のモナドノック山は、なだらかな準平原の上に残る岡とか、リジスタント・ロック（抵抗岩）とか言われている。ラブラドール半島のあたりに起源をもつ大陸氷河が三～四回にわたって、合衆国ではニュー・イングランド全域と、ニューヨーク州の東部少しの部分だけを覆ったといわれる。数千呎の厚さの氷河であった由、何ゆえに南斜面がえぐられたようになるかなど、力学的に解明した書物をノートに写したことがある。

ソーロウはこの山に登ったとき、二回とも頂き附近の岩の傷に磁石を当て、その方向を測かっていた。北北西から南南東と一八五八年の登山の記入に見る。大陸氷河説をたてたルイ・アガッシの影響かも知れない。

たいていのニュー・イングランドの山々は私が見た地名辞典では一つのモナドノックだと記され、マサチューセッツ州中央部北寄りにあるウォーチューセット山も、一つのモナドノックとある。コンコードの岡・フェアヘーブンの上から西北西の地平に孤影を見せるこの山を、「我のごと、友もなく、ひとり立てる」と詠んだ。さらに後の日、また同じ岡からこの山の輪郭を、苦悩は友を求めるという低い（下世話にいうという意味か）理法からだけでもありがたいと記している。あの山の岡々、谷々……ジェフリーの里などに、いかに多く

の人々が雄々しくたくましく生計を続けていることか、このような人々と死ぬも生きるも同じだと思えば気が晴れる。

かつてこの岡に自殺のために登って来たことのあった憂うつ者などは、「このように思い知らされたら、助かるわけであった」と記しているという。この憂うつ者は誰であったかの詮議は困難な問題で、ここではソーロウ的な不屈の魂を山の姿に問うてみたにとどめよう。

英国の言葉でなく、昔ソーロウが使った土地の言葉をできることなら少しでも覚え、そのわずかばかりの単語の知識によってでもソーロウの日記なり、作品に耳をすましたならば、とぎれとぎれであれ、彼のつぶやきが聞けるのではないか。うその単語をどんなに覚えても寝言を聞くようなものであろうが。

例をあげると英国にはヘムロックという木はないが、セリ科の草でドクニンジンがある。主著「ウォールデン、または、森の生活」第六章「訪問者」の一節に、ヘムロック（カナダツガ）の葉を水につけて飲んだことがあるが、暑いときには水よりもよい……をドクニンジンの葉を……と訳したら寝言に聞えないか。ブルーベリーはこのままでいいのに、アオイチゴはこっけいであろう。ハックルベリーもアメリカだけの品だから、このままでいいのにコケモモは、こっけいであろう。

湿原という言葉

失言の文学に外れてしまわないようにソーロウの国の言葉から、湿原らしいものをさがしてみよう。メドウ――ニューイングランドの用法では、平坦な低地の湿った、または水かぶりになり易い草原とDAEすなわちアメリカ英語の辞書に記され、同書にはなお、アメリカ英語の最初の単語集のようなピカリング（一八一六版）を引用して、この単語はもっぱら湿っぽい、あるいは水かぶりになり易い草原を意味する、とある。

ついでに同書の meadow hay を見ると、ウエブスター辞書のサプルメント（一八七九）からの引用として、「荒草、野草、すなわち本当の菅、未耕作の沼地または川沿いの低湿な、または水かぶりになり易い草原に生えるもの、牛のまぐさや氷を包む材料などに用いる。

以上によればメドウは牧場でも牧草地でもなく、イネ科の植物でない菅属などが主体になっている草原、いわゆるスゲ湿原などであろうか。もっとも、沼地（スウォンプ）の草原もメドウというとあるから、それは水ゴケが形成するマット状になったところもいうのであろうか。こんなところには、牧草は生えないだろう。

牧草はイネ科、すなわち本来のグラスで、ソーロウの時代ではブルーグラス、ながはぐさやティモシー、きぬいとそうのことであったらしい。

これをイングリッシュ・ヘイと称し、一番刈は六月初め、メドウグラスの刈入季は八月初旬である。コンコード川が町区の中央ごろの地点で、南方から町へ入ってくるアサベット川とサドベリー川とを併せて、北へゆるやかに流れはじめるあたりの右岸に大湿原があり、これをグレート・メドウズと名付けている。

ここは地図によっては湿原のようになっているものと、湖のようになっているものもあるが、いずれにしても牧草地ではなさそうだ。水はけの悪い土地柄で川がはんらんして、そのままになっている部分であろうか。

昔、ソーロウの時代には牛も馬も飼われていたから、こんなところから刈りとられる野草でも大事な家畜の飼料になり、なおまた当時は、ウォールデンの池の氷などは飛びきり上等な輸出品で、ホイッチャーの詩にいう鉱山物であったから、この野草で包装してカルカッタ、マドラス、ボンベイまでも輸出されたものらしいのだ。「冬の池」の章の末節に、そのことが言及されている。

いまから見ればお伽話であるが、帆船時代ともなれば長い航海となり、船頭のお神さんも甲板で家事をまかない、にわとり夫婦まで波しぶきの甲板を散歩したという。船頭二世の誕生のときは卵も必要であったろうし、東洋の故国の森へもひびくほどのかちどきが挙げられたに違いない。これは、みな昔話に過ぎない。

ハイデ逍遙

一九二三年、二十歳の年に札幌で買った独和対訳のウェールテルがあり、その中に記されるオッシアンの詩こそはゲーテばかりか、ヘンリー・ソーロウをとりこにしたスコットランドの湿原の文学であった。スコットランドの湿原というのは英国全部にも適用されるムーアのこと。

米国の辞書ウェブスターによれば、この語は主としてブリティッシュ、全英国の用法で、広大な面積の木のない、なだらかに起伏する不毛の土地で、砂、岩、または泥炭からなり、ヒース科カルーナ属のヘザー、シダ類、野草や水ゴケ泥炭で覆われている、というのだが、もっと簡単にはヘザーが生えている湿原と言われているようだ。かつてはスコットランド、アイルランド、ヨーロッパ大陸の北半分、スカンジナビアの半分にヘザーが生えるムーアが、あったのであろうか。

昔の地図をたよりにリューネブルグを訪ずね、ハイデを探ずねようとしてハンブルグで本を買ってからリューネブルグに行き、町の南方に車を走らせたが、そのときは行けども行けども美しく黄褐色に熟した麦畑が続き、フランダースのヒナゲシがそのかたわらに咲いているだけであった（リューネブルゲル・ハイデは、一部が自然保護区としてよく保存されている）。

ところで、ソーロウはオッシアンの詩の荒涼とした自然が気に入ったらしいが、英国の詩人はチョーサーもスペンサーも、シェイクスピアをも含めて野生的な調子を出していないという。ソーロウは文学においてわれわれを引きつけるのは、ただ野生的なものだけだと彼はいうのである。

私も自から喜寿を言祝ぐべくコンコードの湿原へ侵入したり、モナドノックの岩山へ駆け登るかなと思ったが、その前の年には発心して伴侶を励ますべく南英はストーンヘンジのあたりに出かけた。エリカなりヘザーさえこのあたりの地質では生えるらしく（ハンブルグで求めた本をたよりに）、一枝をハーデイの小説のヒロインの霊にでも捧げてみようと思ったり、夜行の国鉄でグラスゴーまで信じられないほど親切に扱ってもらい、ベン・ネビスへ最短距離のフォート・ウィリアムを訪ね、せめて山の麓までと単身野道を歩いたり沼地へ入ったり、そこではワタスゲのそばにヘザーと並んで、エリカ属のクロスリーブド・ヒースが生えているのを見たり、ブラックベリーもラズベリーも八月の七、八日でもまだ熟していないので驚いたりした。

ブラックベリーとラズベリー

イギリスでベリー・ピッキングはブラックベリー摘みのことで、これは九月初め頃と昔、英語の教科書に記されていたのを思い出したが（ラズベリーはスコットランドでは、方言でラスプというが）、エジンバラ空港の待ち時間を利用して入口の垣のあたりを物色して、ちょうど食べ頃に熟しているのを十分に堪能したのである。

行く先々のホテルでラズベリーが朝食に出るけれど、改良した栽培種のせいか、小粒の野性種が断然風味がよいのである。これこそベリーのベリー、神の山の産物というべきで、学名も Rubus idaeus ブラックベリーはバラ線以上に強力なトゲがあり、どこまでも長く伸び、その先端が地中にもぐってそこから新しい株になる。大変な生活力で一株から五升も採れたと喜んだ人もあるが畑中にはびこって、なんとかならないかと困り抜いた人もある。

それでも、これは垣根に這わせ、時どき伸び過ぎた脇枝を切りとれば、仙台あたりではイギリスの九月初めより二カ月も早く、七夕祭には最盛期は終っているけれども後から後から実るので、健康的な赤紫のジュースを夏の終りまでいただける。ジャムにして貯蔵し、熱い湯をついで飲めば木枯も、風邪も治まるという。

四十七、八年前に函館の英人屋敷の人に、そのように聞かされて苗をいただき、仙台でも札幌でも行く先々で育てるので、こんな美食のせいで長生きせねばならぬかと切ない次第なれど、自然保護運動の行末やら、末の世にも未練は残るし、われながら困ったものではある。

コケモモは、ソーロウはコンコードに見ず、メインの旅ではいたるところで摘んだようである。モナドノック登山で山頂近くの岩の合間に、こんな小さいコケモモがあるかと驚いたか知れない。私は初めてあの山の林道でトイレを捜しながらクリントーニア・ボレェィリスの青い実を見るに及んで一切の用件を忘れた。

ウォルデンの鳥たち

湿原の野性をたたえたソーロウが三度も訪ねたメイン州は、地図を見ても湖と川が入り乱れ、その川は海を忘れたように思い思いの方角へさまよい流れている。大湿原に違いない。湖の岸に野営する毎に、夜半、遙か遠くの水鳥ルーンの鳴声が湖面を渡って聞えるのであった。

ルーンはアビ科の鳥で、ソーロウが述べるには孤独な水鳥で、渡りのときも一羽か二羽、同じ科のアビやオオハムは群居性で、二者は冬期一、二月頃、広島県などの海に大群をなして渡り、魚の群を追いまわすのを漁法で利用する由。

ソーロウが主著の中でも七カ所で記している鳥の鳴き声には二色あり、その一つは魔神のような、この世のものと思われぬような笑い。二つは、Looningといって長く引き伸ばした哮え方、猿のような何かの動物が、鼻面を地面に当てて懸命に唸るような音なそうで、オックスフォードの辞典などもこのLooningの例文を「メインの森」から引用している。それよりも早い用例は、一八五四年の「ウォールデン」にもっと美事に記されている。

この鳥は日本に渡来しないが、鳥学者・小林桂助氏の本ではクロハシアビとしている。Birds of America(1917)は、この鳥の俗称を十ばかり記し、その一つにブラックビルド・ルーンとあるし、適切な和名だと思う。ソーロウのその本が出版される百年前に生まれたアメリカの詩人で、その本に記されている説明よりももっとうまく、この鳥を述べていることに注目したい。

つぎに作品「散歩」のことに触れておこう。これは岩波文庫、「市民としての反抗」の中に入っているが、これはソーロウの湿原文学といってよいだろう。たとえばその中に、こんなくだりがある。「私は気晴らしをしようと思うときは、真暗な森を、樹木の繁茂した果てしない陰気な沼地を捜してゆく。私は沼地を聖土中の聖土として入ってゆく」「私は村の中の耕された畑によってよりも、むしろ郷里の町の周囲の沼地によって養われている。」

「私の目には地球の表面の、これらのやわらかな場所を覆っている、ドウォーフ・アンドロメダ(ホロムイツツジ)の密生した花壇ほどの豊かな花壇はない」。ここで村というのは、この町の一番人家があり、町の役場や警察や郵便局など一切の施設・機関が人家、店屋などと集まっているところのことだ。「人は私を、つむじ曲りと思うかも知れないが、もしも人工をこらした最も美しい庭園に住むか、それとも陰気な沼地のそばに住むかと言われたら、私は沼地に決めるだろう」。

コンコードを訪ねる

一昨年、彼の誕生日に行われたソーロウ協会例会に十人あまりソーロウ家ゆかりの人々が、ゲストとして参列していた。会が始まる前に会場の下の廊下の椅子にかけていたところへ、中年の婦人が名乗り出て、聞けばソーロウ兄弟の求婚を次々に拒んだ人の玄孫かにあたる人であったようであった。

彼女は次の日に老父母を訪ねるという。私もコハセット訪問は予定していたので、その人の車でその海岸を訪ね、エレンがヘンリーの兄ジョンの求婚を受けたところはあそこだと知らされたり、エレンの父の教会のあるシテュエイト町へ寄って、その教会の中を見学したり、その人の九十一歳とかの父にも会い、二人で私をクウィンジーというボストン南の市まで送ってくれたのであった。

七月十二日には、もう一人の娘さんに会ったが、これは昔、ソーロウ家に止宿していたウォード夫人の後裔で(エレンの母はウォード夫人の娘)、翌日、ウォード夫人の墓詣りに同行したのである。これは不思議なめぐり合わせで、またとない機会にコンコードを訪ねたものと思われた。

ソーロウが〝アンドロメダの池〟と名づけた池はホロムイツツジの密生する

ところで、ウォールデン池の南方四分の一哩ぐらいのところにある三つのつないだような池、その一つは水が深いのでホロムイツツジはなさそうだが、二つの池にはいまでも生えている。

池の東岸から西の方を見ると、密生するホロムイツツジの葉が沈みゆく太陽に照らされ、くすんだ葉が赤褐色に輝いて見えたが、一八五三年四月十九日の日記に、「この葉が私の世界の大聖堂の彩ガラスの窓だ」と記しているのは、この情景のことであろう。

柳に寄せて

さて、ソーロウの柳と英国の詩人たちの柳について調べてみよう。

古い英国の詩歌では、柳は恋人に捨てられた男が、その枝を輪に編んで黄と赤のスカーフの代りに、それを帽子に巻いたり、「おゝ　柳よ、柳よ」のくり返しで歌われるのは捨てられた男の歎きであったが、詩聖ベン・ジョンソンは「仙女王」の初めのあたりの詩に「捨てられたおみなたちが著ける柳」と歌い、シェークスピアもオセロでデズデモーナに、「柳よ、柳よ」と歌わせ、ハムレットの場合にもオフェリアの哀れを柳で伝える。

――王妃の言葉「小川の上に斜めにかかって、鏡のような水面に白い葉裏を映している柳の木がありますわね、その小枝であの子は不思議な冠を編んでいたの……」、ソーロウはこれらのイギリスの詩を全部知ってのうえで「あゝ、柳よ、柳よ、私はいつもお前の元気がほしい」という。「人が柳を絶望の愛人のしるしと言っている意味は、自分にはわからないんだ――捨てられた女たちがつける柳だって！」「バビロンの柳(weeping willow しだれ柳)はニュー・イングランドには雄株が一本も入っていないといわれているのに、希みにあふれて花を咲かせている」。氷にいためつけられてちぎれ、ちぎれになった枝に根がついているのを見ては「柳はnever say die(柳は弱音を吐かない)」と記している。これがソーロウの柳に対する感情であり、恋愛観ではなかっただろうか。

〝湿原の文学〟という主題からはいささか外れたかも知れないが、それにしてもコンコードは柳が多く、ソーロウの日記に学名付きで二十種くらい記されている。

ボストン・マラソンの山田敬三氏も走りながら、ほかの木は知らないが柳また柳を見たという。ハーバード大、コンコード・フィールドセンターのレイ・アンジェローは、ソーロウの日記の植物のインデックスを編む心組みというが、二、三度、私の宿の女主人と共に湿原に入ってくれたり、カヌーを二人で漕いでくれたり、ついでに三種ばかり柳の枝を見本にもいでくれた。

アンドロメダ、ポンズ一円はその節、開発の手におびえていたが、危機を脱したのもソーロウの思い出によるのではなかろうか。

私は、その人の思い出ゆえに海岸を訪ねた次の日は単身、一本櫂を操ってサドベリー川を溯ってプレザンド、楽しいという名のメドウ湿原、その傍の「ベイカー農場」まで挑戦し、ソーロウが神殿に詣でるように訪れたという高木を仰いだり、伏しては夕餉の美酒にブルーベリーを酌み、身に夕影の迫るのも忘れたのであった。

（東北大学名誉教授）